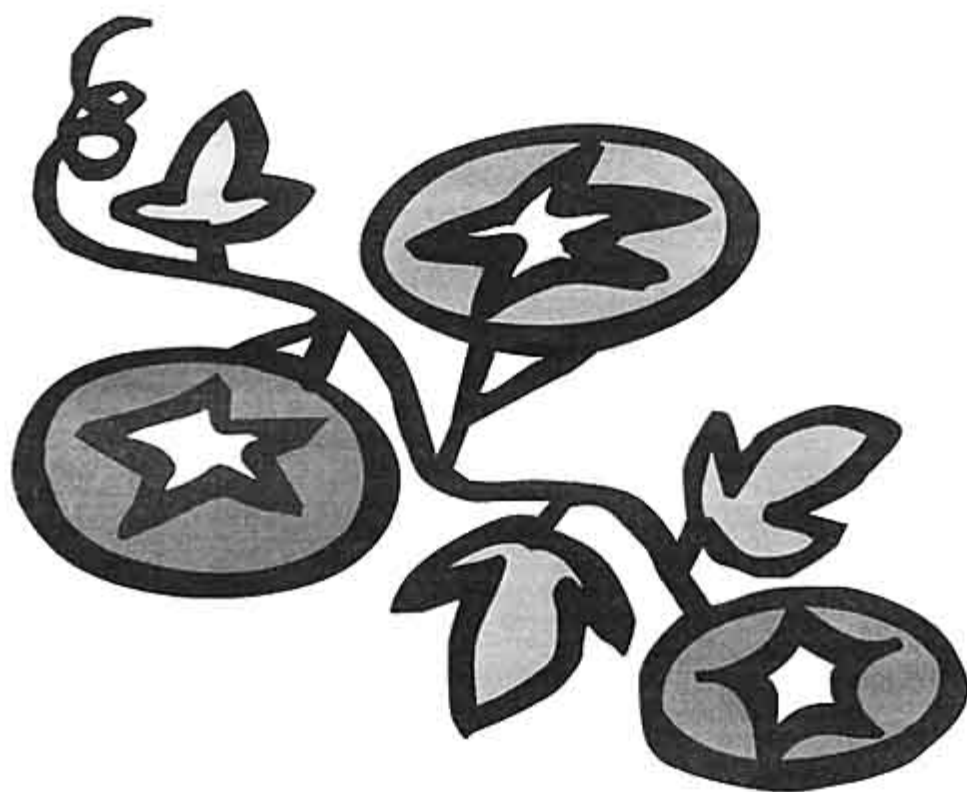


♪ シニア便り ♪



第 11 号 (2007年6月発行)

発行 北海道シニア吹奏楽団 事務局

編集 『シニア便り』編集部

新入団員からの手紙にかき

『はじめまして！』

フルート 上 岡 貴 子

フルートとの出会いは中学校に入学して間もなくのころのことでした。田舎の学校で部活動の数は少なく、しかも吹奏楽部以外は全て体育会系。運動が苦手なキライ、でも何か部活動なることをしてみたいかと私にとって、選択肢はただ一つだったのです。フルートを希望した理由・「銀色の横笛、吹けたら格好いいなあ」。そんな見た目で始めたフルートだったので現実には甘くありませんでした。周りの先輩や同級生たちは、当時コンクール全道大会の常連校だった小学校で続けてきた人ばかりということもあり、1年生でも当然のように合奏に参加していました。そんな同級生を横目で見つつ教則本を見ながら独学で練習し、少しずつ音が出るようになってきたある日、顧問の先生に呼ばれました。

「オーボエやらないか？」「・・・いやです。」
フルートは先輩方がいたのですがオーボエを吹く人は誰もいなかったのです。今の私だったら「オーボエ、オイシイなあ」と悩んだのでしょうか、そのころはオーボエの魅力を理解できないお子様だったため、眼中にありませんでした。顧問の先生と同じようなやり取りがしばらくの間続きましたが、そのうちオーボエに変えるのを諦めたようでした。もし、あのころオーボエに変わっていたら・・・？当初の希望どおり3年間フルートを続

け、高校でも吹奏楽部に入部しました。もちろん希望はフルート、しかし・・・ここでもフルートの先輩方が大勢いました。そのため、「今年フルートに1年生は入れない」。なんでこんなにフルート人口が多いんだろう、と思いつつ合奏を見学しふと気付きました。

「ピッコロがいない！」

折しも両親が高校合格祝いに楽器を買ってくれたとのこと、迷わずピッコロを選びめでたくピッコロ席に収まったのでした。今吹いているピッコロはその時からのもので、この話をするに必ず「特殊管を先に買った珍しい人」と言われてしまいます。

プラス漬けの高校生活を送った後大学へ進学。そこにはできなかったばかりの吹奏楽部がありました。貴重な大学生活、どうせなら違うことをしてみたいと思いはじめたのは野球部のマネージャー。かくしてピッコロはケースにしまわれたまま大学を卒業、国家試験も無事合格し社会人となりました。職場はとて忙しく、休日にはひたすら家で寝る生活がしばらく続きましたが、そのうち「何かやりたい病」でうずうずしてきました。

そんなころ、高校時代の友人からブラスに誘われ、それが再びピッコロをケースから出すきっかけとなりました。その後フルートを手に入れ、基礎からやり直すべくレッスに通い、今日に至っています。今となってはブラスに引く張り出してくれた友人に感謝、感謝です。以前在籍していたバンドの常任指揮者が中村先生だったこともあり、シニア吹

奏楽団の存在は以前から知っていて、「イギリス民謡組曲」を演奏した年の定期演奏会を聴かせていただいたことがあります。その時の演奏から「オトナの『楽しく、温かく、そして一生懸命』なバンド」という印象を受けました。実際合奏に参加してみると以前感じたバンドの印象は変わらず、その中に混じって落ちたり音程が合わなかったり冷や汗をかきつつ、楽しんで吹かせていただいています。音楽的にも人間的にもまだまだ若輩者ですが、「上質なオトナの趣味」をシニアで楽しみたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

『吹奏楽と私』

フルート 高橋 富代子

聴くことが大好きで子どもの演奏会、コンサートホールなどで聴くことに、一つの音色が重なり合って響き奏でる演奏にいつもつとつと癒される思いです。いつか自分も楽器で伝えることが出来るならと夢のように思っていました。今から7年前、大学退職を機にフルートを吹きたいと強く思いました。

楽器に触れるのは、小学校の音楽の時からで、音符も読めず、リズムに乗れず、最悪な状態で音楽教室に通うことになりました。

音は出ない、出せないと悪戦苦闘しながら、いつもの「何とかなるさ」の気持ちで吹き続け、どうにか5年目で曲らしく吹けるようになると、音楽でポランテ、イア活動や、皆と合わせて楽しみたいと思う気持ちがさらに膨らんできました。

新聞で目にし昨年の演奏会を聴かせていただきました。ちょうどそのころ、中学校の同窓会がありまして、30数年ぶりに会い、和気あいあいの中、皆前向きに頑張っている様子にとっても刺激を受け中途半端な今の自分に背中を押される思いで、北海道シニア吹奏楽団の見学希望をお願いしました。

楽団経験のない私が、初めて指揮者の下で練習に参加し、ほとんど吹けてないのに他の音と交わり合って聴こえたときの「感動」は忘れません。シルバー人材センター依頼の演奏会で味わう緊張と感動を得られたことは、仲間に加えていただいた楽団の皆さまに深く感謝いたします。

練習を重ねるたび、中村先生の指導はいつも首への責任と重さをあらためて再認識させていただき、ありがとうございます。シニア吹奏楽団の皆さま、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

『吹奏楽と私』

オーボエ 松本 良一

このたびは、シニア吹奏楽団に入団させていだいて本当にありがとうございます。私には現役高校の音楽教員です。声楽科の出身なのですが、吹奏楽とは20数年前、前任校で吹奏楽部を受け持った際の付き合いです。

楽器の奏法もよくわからず、吹奏楽コンクールでは、たいした成果をあげられず「私の指導法が良くないのかな」などと考えて、悶々の日々を過ごしていました。

た。札幌へ転勤となって、また吹奏楽部の顧問となってしまいました。今度こそ自分で何か楽器を始めなくてはと思いい、一念発起してオーボエを始めたわけなのです。しかし札幌の吹奏楽は非常にレベルが高く、相変わらずコンクール不振が続いています。

来月3月でいよいよ定年退職となりました。そして「もう、吹奏楽から足を洗おう」と考えていました。しかし無理して買った自分の楽器もあるし、音楽への愛着もあり、「どうしようかな」と何か吹っ切れない気持ちでした。そのとき偶然インターネットでシニア吹奏楽団のホームページを目にしたのです。シニア吹奏楽団としても新鮮な響きでした。

練習に参加させていただいて、中村先生の経験豊かな指導のもと、ひたむきに音楽に打ち込む皆さんの熱心な姿にすっかり感動してしまつたのです。途中の休憩タイムもとてもいいと思ひました。

もつと驚いたのが事務局長の渡辺順三さんが私と同期だとわかつたときです。3年間同じ校舎に通いながら、互いに顔もわからず今回、奇しくも机(譜面台)を並べることとなつたわけで、まったく不思議な縁だと思つています。他にもご父兄の方々がいらして、これは気を引き締めて頑張らなくてはならない、と改めて自覚した次第です。

私自身は黙々と楽器を吹いているのが一番、気楽でいいです。まだ、ちよつと雑用に追われ多忙ですが、今後とも末永くよろしく願ひいたします。

『あの頃』

パーカッション 横山 千草

☆日曜日。5時半起床。朝食とおにぎりを作り、野球小僧達を送り出す。洗濯して、昼・夜ご飯を準備し、いざ大蔵ホールへ！

☆中1の春、グレンミラーの生演奏に感化されて入った吹奏楽部。「お前方ありそうだな」と顧問の先生の一声でパーカッションへ。走りこみ、筋トレ、基礎打ちの日々。ドラム候補の男子三人が次々転校していくと「よし、お前ドラムやれ」「ひえー私？」「もつとアドリブ入れろ」CMや歌番組からドラムの音をひたすら拾い、寝ても醒めても頭の中はリズムでいっぱいだった。

☆高校からは軽音楽部。15年分のお年玉をつぎ込んだドラムセットで、ヘビメタ、ロック、ポップス・・・と手当たり次第にコピーして、学校祭でお粗末なライブを演じたりした。短大のオールディーズバンドでは、夜中まで「あーだこーだ」とアレンジを加え、時には喧嘩もした。みんなで揃えたステージ衣装はどこに行つたんだろう？

☆今現在、手足はもつれ「マンボ」が終われば息も絶えだえ(笑)技術も体力もあのころの自分にはとても敵わない。けれど、笑顔で楽器を運んで下さる皆さんから「楽しい気持ち」をたくさんいただいて(いつもありがとございます)リズムカルに歩く帰り道は、何とも満ちた気分なのである。

☆さて、家のドアを開けると、そこに

は泥どろのユニフォームがー！母さんの日常はまだ続く・・・。

☆未だに楽譜が苦手で、音階楽器がまるでダメな私ですが、少くしずつ頑張りますので、どうかよろしく願ひいたします。

『戻り組の私から』

トランペット 古川 亨

私と楽器の出会い、小学生のころ、私の兄が家に持ち帰ってきたホルネットを触らせてもらい、吹いて音が出るようになったこと、「何とかこの楽器が欲しいなあ」と思いながら高校2年生でやつと吹奏楽部ができて、入部することになります。そこで、外部指導者の林正輝先生との出会いが始まりました。

それまで音楽の専門の人と接したことがない私にとりましては、見るもの聞くもの初めてであり、勉強はそつちのけで高校の2年間の部活動を経験することになります。先生の教えもあり、部結成2年目の高校3年生の年には、札幌地区コンクールA編成の部に出場することができました。結果は予想していたとおりの最下位ではありましたが、2年間の集大成として、当時の王者である、札幌光星高校吹奏楽部に挑むことができました。私たちの次の世代が3年目出場したときには、堂々と札幌地区コンクールにおいてA編成の第3位に入賞する足がかりを作ることができたのです。

この出会いから、林先生との交流が始まり、このシニア吹奏楽団を作るときから微力ではありましたが、お手伝いをさ

せていただきました。根っからの素人でもあり、演奏はもとより、裏方の事務処理などにおいても足手まといになり、ご迷惑をかけたことと思ひます。諸般の事情により、しばらく団を離れておりました。

昨年の定期演奏会でのシニア吹奏楽団の演奏を初めて、外から眺め音を聞くことができた感動をしたところでありました。

「何かできることがあれば」と思ひ、出入りをさせてもらっているところでありました。あまり、上段に構えず平常心を持って皆さんと共に歩みができればと思ひながら、練習や飲み会に参加していきたいと思つております。よろしく願ひいたします。

『私の吹奏楽雑記帖』

副団長・常任指揮者 中村 暁生

(6) 音楽用語のこと

シニア吹奏楽団での14年を各約40年棒を振っています。今もって私自身が混乱したままになっていることの一つに「音楽用語」があります。

こんな状態の私の言っていることを聞きながら演奏されている皆さん(そそい迷惑、練習の度に「申し訳ない」と何度も反省しています(本当か？の声あり)。チョット言い訳めいたことになりましたが、これにはながい西洋音楽の歴史と日本の事情が背景にあるのです。

最初に「音名」ですが、ピアノの白鍵に相当する「幹音」の名前は日本のハニホヘトイロをはじめ米英の C D E F G

AB、ドイツのC D E F G A H、イタリア・フランスのド(ウト) レミフアンラシなどがありますが、楽譜を音名で読んで歌うソルフェージュでは何と言つても母音が後に付くイタリア語が歌いやすく、音楽史上最も早くオペラが誕生し盛んになったのはこのことと深い関係があると言われています。

戦争中、敵性語禁止で(何故か同盟国であったイタリア語も)ドミンをハホト、ドフアラをハヘイなどと歌わされて苦労したことを思い出しますが、現在では日本語の音名はMCや印刷物の中で「ハ短調」とか「ハ長調」とか言う以外に使われなくなりました。

明治2年(1869)、横浜の妙香寺に集められた薩摩藩士十数名が英国人のフエントンから吹奏楽を習ったのが日本で最初の西洋音楽教育で、その後フランスやドイツから指導者を招いて創設された陸海軍の軍楽隊が、明治20年(1887)に開校した東京音楽学校(ドイツ系の先生が圧倒的に多かった)とともに第二次世界大戦終了(1945)まで洋楽教育と普及の中心となっていたのです。戦後は皆さんもよくご存知のとおりアメリカの音楽が大量に流れ込んで吹奏楽もすっかりアメリカナイズされてしまいました。洋楽が渡来してから約140年、主として欧米の音楽を取り入れてきた私たち日本人は他の文化と同じようにそれを消化し、巧みに使い回しています。

「音名」の話に戻りましょう。
管音の音名はイタリア語、フランス語

が一番解りやすいのですが、それを半音上げたり下げたりした「変位音」の音名となるとガラリと様相が変わります。例えばドの#はドダイエーズ(伊)、ドダイエジス(仏)、ラの♭はラベモール(伊)、ラベモレ(仏)となつてややこしく、英語はシーシャープ(C#)、エーフラット(A♭)、これらに対してドイツ語は#はis、♭はesを付けて、チス(Cis) アス(As) 母音の後ではeを省略)と実に簡潔です。

私が長らくお世話になった陸上自衛隊音楽隊はフランス式の教育を受けていた旧陸軍音楽隊の流れを汲んでいたもので、最初の頃はシベモレとかブティケース(小太鼓)とか言われて面食らったことがありますが、次第に音名については最も合理的で、クラシック音楽界でも多く使われていたドイツ語が使われるようになりまし。

合奏練習の時ついつい「下のシャープ」(伊米連合)とか「そのゲの音低い」とか支離滅裂なことを叫んでいるのは以上のような深い訳があったのです。
次回はその他の音楽用語について書こうと思つています。

チューニング広場

シニアの15年を顧みる

懇談会の開催

去る2月4日(日)、札幌市南区民センターにおいて、15周年記念事業準備委員会

の発案により標記の懇談会を開催しました。林団長、中村副団長、古川元事務局長、前谷益事、渡辺事務局長の5人から、団設立までの過程と当時の思い、練習の開始から第1回定期演奏会までの状況、運営面での苦労話などを、およそ2時間にかわつて語っていただき、準備委員が聞かせていただくというものでした。

懇談会の詳細は、来年度に発行する15周年記念誌に掲載する予定ですが、団設立にあたって作成した募集チラシが残っていることが、懇談会の中で判明しましたのでその写しを裏表紙に掲載して紹介します。設立当時のことを知る団員が少なくなっている現状の中で、その原点となる団長の思いを確認する上で貴重な資料ではないかと思ひます。

これからも、15周年記念事業を進めていく中で貴重と思われる資料が見つかった場合は、シニア便りでも紹介をする予定です。

札幌市シルバー人材センター

総会で演奏しました

去る3月13日(火)、札幌市シルバー人材センター様の依頼により、北海道教育文化会館大ホールで行われた同センターの総会で、400人余りの出席者を前に演奏しました。当日の曲目は次のとおりです。

- 1 行進曲「虹と雪」
- 2 白い恋人たち
- 3 メモリーズ・オブ・ユー
- 4 アメリカン・グラフィティ

- 5 地上の星
- 6 北国と演歌あらかると

【アンコール】

・ブラジル
・君が代行進曲

当日参加した団員数は、常任指揮者の中村副団長をはじめ21人、14人のエキストラの応援をいただきました。
以下は、当日参加した渡辺事務局長の感想です。

- 1 練習場所の確保に苦戦(いかにシニアが恵まれているかを実感)。
- 2 日曜日以外の演奏は、無理だと納得。
- 3 北国と演歌では、各パートが立って演奏、貴重な経験でした。
- 4 参加できない団員が、3人も応援とお手伝いに駆けつけてくれました。さすがはシニア、大感激でした。
- 5 中村先生から、とても好評だったとの電話をもらいました。過去にも2度依頼を受けておりましたが、何とか副団長の顔を立てられ、ホッとしております。皆さん、お疲れ様でした。

平成19年度定期総会

開催結果報告

去る5月19日(日)、平成19年度定期総会がホテルサンルートニュー札幌において開催されました。林団長が今年も元気に出席され、終了後の懇親会にも参加されて、団員との交流を楽しんでおられました。

総会では、山田光国さんを議長に選出し、会の成立が宣言された後、議案の審

議に移りました。平成18年度一般事業報告が渡辺事務局長からあり、保管庫の移動、第13回定期演奏会の開催、仮入団制の導入、15周年記念事業の立ち上げ、札幌市シルバー人材センター総会での依頼演奏などが報告されました。

平成18年度収支決算報告、監事の林重男さんから監査報告あり、平成19年度事業計画と予算案は、ともに承認されました。

中村副団長による平成18年度全体総括の要旨は、次のとおりです。

・ 団の規模、技術ともに、着実に進歩してきている。特に団員数は、昨年の40人から現在は45人（正団員42人+仮入団者3人）となつてきている。

・ 入団のまとまりが良くなつてきており、シニアらしい音色ができてきた。

・ 音域も拡大してきているが、今後はピッチの確実さをさらに高めていきたい。

・ 今年の定期演奏会では、あまりエキストラを入れずに演奏ができるようになりそうである。

・ 団員数が増えたことにより、相互のコミュニケーションをさらに深めていく必要がある。みんなで仲良く楽しく、という基本姿勢を守りつつ、さらなる発展を目指したい。

・ 昨年の定期演奏会はおおむね成功し、赤字の幅も少なくて済んだが、入場者数の拡大が課題として残った。

・ 札幌市シルバー人材センター様からの依頼演奏は、団始まって以来のものだったが、好評をいただくことができた。今後この種の演奏の依頼があれば、少し

ずつでも対応していきたい。

・ 15周年記念事業については、皆さんの思い出に残る有意義な事業にしたい。

今回の総会では、規約の改定が提案され、事務局を事務局長宅に置くことと、特別会計の廃止とそれにより必要となる条文の整理が提案され、承認されました。

第14回定期演奏会については、実行委員長林重男さんより、未定の曲が1、2曲あるが5月中には決まること、小学校との共演は今年も札幌市立旭小学校に決まったとの経過報告がありました。今後は広告の募集とチケットの印刷、お楽しみコーナーでの協賛会社の募集に取り掛かるので、団員の協力をお願いしたいとの要請がありました。

15周年記念事業については、準備委員長の吉田さんより、6月に準備委員会の全体会議を開催する予定であり、今年度は年内に1回と3月に1回開催予定であること、平成20年4月からは実行委員会に移行することなどの報告がありました。最後に、山田議長が退席して閉会宣言がなされ、無事に総会が終了しました。

団の運営・活動に対する意見の募集

北海道シニア吹奏楽団は設立15周年を来年度に控え、活動面も団員数もおおむね順調な発展を見せています。

その反面、団員数の増加により、各団員の思いがなかなか役員会のレベルにまで届きにくくなっていることも痛感しています。

つきましては、団員の皆さんの意見を広く伺いたいと思いますので、事務局長・渡辺の下記連絡先までお寄せいただきますよう、よろしくお願ひします。

Eメール junzo.w.3.1.sax@ezweb.ne.jp

☎ 511-1921、**FAX** 511-1923

《編集後記》

シニア便り編集部にて、新しいメンバーが加わりました。これまで男の一人所帯だった編集部にて、新しい風を運んでくれるものと期待しています。これからの新しい編集部とシニア便りを、暖かく見守っていただければ幸いです。では、自己紹介をどうぞー編集部

このたび編集部員に仲間入りいたしました。加藤那那です。よろしくお願ひいたします。

近藤編、酋長の負担を少しでも減らせることができました。……と思いつつも、今のJUNZOの逆になつていらいふな気がしますが……。

シニア吹奏楽団に入団して、早2年が過ぎました。もっと団員同士とお話をしているようなところを吸収していきたいと思っております。どうも何となくわかりにくい私に親身にご指導いただきありがとうございます。

最後に、最近の趣味は（誰も聞いてない）カメラです。カメラ好きの方、お話しませんかーお待ちしています。